

初期言語発達に関する研究

—原言語から言語へ—

小 椋 たみ子*

Tamiko Ogura

A Study of Early Language Development

—From Protolanguage to Language—

Abstract: The purpose of this study is to clarify the process of the transition from prelinguistic vocalizations to two-word speech.

Three children were observed from about seven months to the beginning of two-word speech every three weeks. The vocalizations which they uttered for twenty minutes in the manipulation of objects and play were analysed.

The spontaneous vocalizations were divided into babbling, protolanguage and language. Through the percentage of each vocalization, the outlines of the transition were clarified. In protolanguage, phonetically consistent forms were observed in a particular context. Four function categories for the phonetically consistent forms —affect expressions, instrumental expressions, indicating expressions and grouping expressions which Dore et al (1976) reported, —were identified.

First words emerged at 9 or 10 months and the referential words increased after the demonstratives, ie, here, this, appeared. Before two-word speech began, the word combinations which were accompanied by an interjection and a particle, and repetition of words emerged. At about 18-20 months, two-word speech began.

The vocalizations, except the babbling, had meanings which were categorized into eight functions: personal, interpersonal, instrumental, descriptive, regulatory, question, informative and imaginative functions. The order above represents the sequence of the emergence. After the emergence of the instrumental vocalizations, the first words appeared. The appearance of the regulatory vocalizations correspond to the emergence of the referential words.

Vocal imitations were not only sound repetitions, but had the meanings mentioned before. After the demonstratives emerged, vocal imitations with descriptive functions increased and contributed to the acquisition of words.

From these results about language development of normal children, some suggestions were able to evolve for the training of language-delayed children.

問 題

ことばの獲得を前言語段階からの音声、身振り、動作、表情等を含めたコミュニケーション行動の発達の中に位置づけた実用論的アプローチからの研究が1970年代後半よりさかんになり言語発達研究は新たな展開をはじめた。Bates (1976a, 1976b) は実用論を文脈の中での言語の使用を支配している諸規則と定義し、意味論的なもの、統語論的なものが実用論的なものから派生すると述べている。

ことばの獲得の遅れている子どもをみていく場合、前言語段階でのコミュニケーション活動を十分に育てることが重要で、この実用論的アプローチからの検討が示唆が多い。有意味語のない子どもが“うー”と発声しても彼の表現する意味は多様である。“棚上の玩具をとってほしい”“棚の上に最適な自動車があるよ”“これは何?”等。音声が発せられている状況、その時の子どもの身振り、表情、音声の抑揚、強弱など行動文脈との関係で音声の意味が推測される。大人の側がそれらの意味を読みとり、言語化し子どもにフィードバックしていくことが、言語獲得を促進させていく。

本研究においては、健常児の音声は喃語から意味をもち、我々の社会で使用している音韻形態のことばへどのように発達していくかみていく。喃語と言語の中間に位置する表現・内容から構成された音声を原言語と名づけ、原言語も言語と同じような意味内容をもち、初期言語発達期のコミュニケーション行動において大きな役割をはたしていることをあきらかにしていく。

まず、健常児の前言語から言語への音声面の発達についての研究を概観してみる。

大浜ほか(1978)は、8児の2カ月から17カ月の隔週の擬似観察データを2カ月単位でまとめ、喃語、原初語——日本語になっていないが、文脈により伝達意図のわかる発声、言語の出現率をみている。喃語は発声行動の中で一番頻度が高く、2・3カ月から14・15カ月までの間は増減をくり返し、はっきりした傾向はないが16・17カ月になると激減する。原初語は6・7カ月で初出するが頻度は少なく、12・13カ月で増加し、16・17カ月でさらにふえる。言語は10・11カ月で初出し、16・17カ月で特にふえるが頻度が少ないことを報告している。

武井ほか(1984)は男女各3名の3, 6, 9, 13, 17, 21, 24, 30, 36カ月の半統制遊び場面での発声形式について、3カ月は発声の全てが喃語で、9カ月で65%, 13カ月で14%と激減し、24カ月以降は全くみられな

くなる。原初語は6カ月で6%を占め、13, 17カ月は70%前後が原初語であるが以後21, 24カ月で激減する。言語は9カ月で僅かにみられ(独言、掛け声)、13カ月で平叙、返事といった形式が出現、17カ月で命令、Wh 質問がみられ、言語は21カ月で急増し、全音声の84%を占めるようになったことを報告している。

Dore ら(1976)は、11カ月から1才4カ月まで4児を毎月1回1時間、子どもがよくしている場面での自由遊びをVTR録画した。その結果、喃語と単語の中間に音声的に一貫した形態を子どもが生産することを観察し、これを音声一貫様式(PCF, Phonetically Consistent Forms)と呼び4つの機能カテゴリーをみとめている。(1)感動表現(affect expression)—喜び、満足、怒り、抗議といったムードないし態度の音声的表現、(2)道具的表現(instrumental expression)—事物の要求、大人を特別の活動に従わせようとする文脈で生起、(3)指摘表現(indicating expression)—環境のある側面に気づくとき、あるいはそれを指摘する時に生ずる、(4)群化表現(grouping expression)—子どもにとり等価な事象に対して群化の操作を加えることによって同一の音声パターンを結合させる。(3)の指摘表現、(4)の群化表現は指示機能の芽と考えられ初語の発現が促進されることをのべている。

Halliday(1975)はノートと鉛筆で記録した自分の息子の発達データについて、9カ月から1才半までのを6週間毎に意味系の記述に解釈した。0;9から1;4(1/2)までを位相I、1;4(1/2)~1;6を位相II、そのあとを位相IIIとしているが、位相IIIに関しては、開始期、終了期、分析結果とも提出されていない。彼は真の言語を定義する特徴である三層構造——内容・語彙——文法・表現をもたない二層構造——内容・表現から構成された音声を原言語(protocolanguage)とよび位相Iと位相IIの初期に位置づけ注目している。原言語においても、内容と表現の間に組織的な一貫した関連があり、(組織性)、それらの音声や行為は子どもの生活に役立てられている(機能性)。位相Iでは6種の意味機能——道具機能、統御機能、個人間機能、個人内機能、発見機能、想像機能——が仮定された。位相IIにおいては語彙—文法をもつ言語があらわれ、成人の言語体系への移行を開始する。対話の原型である情報機能の意味機能があらたにあらわれる。道具、統御、部分的に個人間機能はプラグマティック機能に、個人内、発見、部分的に個人間機能は事物認識に役立つ学習機能であるマセティック機能に発展していく。位相IIのおわり近くになるとプラグマティック機能とマセティック機能は1つの発話に

共存し同時に発動されるようになる。位相Ⅲは成人言語の体系と機能が達成される。代表機能、指示機能、認知機能を含む観念操作機能と表現一動能機能 (expressive-conative function), 社会的機能、喚情機能を含む対人機能と言語に固有の内発的な機能であり、それによってほかの機能が効果的に役立てられるテキスト機能の3つの機能がある。Halliday によれば子どもは原言語から成人言語体系への移行の中で文化を学習していくのである。

Dore らのいう音声一貫様式, Halliday の原言語の研究は、言語と喃語との中間に位置する音声において、子どもはすでに意味機能の体系をつくりはじめていることを示している。Dore らの研究では4つの機能の出現の順序についてはとりあげていない。Halliday の資料は一児の日誌的観察によるもので、情報機能の出現が位相Ⅱであることは述べているが、他の機能の順序性は述べていない。

本研究においては、7カ月すぎから2語発話出現までの3児の縦断的資料から音声の種類、内容、意味機能がどのような過程を経て発達していくかあきらかにする。そして健常児の原言語から言語への発達の過程の分析からことばの獲得の遅れた子どもへの言語指導の方法にいかなる示唆があたえられるか検討してみる。

方 法

被験児 A児(女), B児(男), C児(男)。A, B児は1才4カ月違いの姉弟。C児は観察当時1人っ子。3児とも健常な発達をしており父母就労のため生後まもなくよりA, B児は知りあいのおばさんが自宅に来て(午前8時—午後7時頃), C児は知りあいのおばさんの家で(午前8時—午後6時頃)養育されていた。A児は1才9カ月でB児は1才6カ月で、C児は2才1カ月で保育所へ入所した。

手続 約3週間間隔で午前あるいは午後約2時間、養育されている家を訪問し、子どもの生活している部屋で、一定の遊具での遊び(事物操作場面、絵本場面)、認知課題検査、言語理解検査を実施した。事物操作場面での遊びは食事、身づくろい、入浴の道具、遊具、動物の絵が描かれている積木6ヶ、2cm³の赤い積木10ヶ、ボール大小、人形と人形の衣服、ぬいぐるみのパンダ、ゴム製動物人形、ガラガラ大小、ひもつきトラック(絵本があることあり)を提示し、自由に大人(A, B児は養育者, C児は筆者あるいは学生)と最低20分間遊んだ。観察場面にはA, B児の場合対象児(A, B児一緒の場

面は殆どない)、養育者, VTR 録画者, 記録者が, C児の場合対象児, 養育者(対象児より少しはなれている。いないこともあり), C児と遊ぶ大人, VTR 録画者, 記録者がいた。VTR 録画者が記録者をかねることもあった。

分析資料 事物操作場面での20分間の大人との遊び場面で発せられた音声を量的分析の対象とした。認知課題, 言語理解検査場面など約2時間の観察場面で発せられた音声, 養育者, 家族からの報告を資料とした。分析にはVTR 録画資料を用いた。

分析方法 (1) 音声の種類

20分間に発せられた音声について、自発音声(むずかり、泣き声、笑い声は除外)と模倣音声を息の切れ目を1と数え、以下にのべる分類を行った。模倣音声は先行する大人のモデルの発話の全体、一部が反復されている即時模倣だけをとりあげた。自発音声について、喃語、原言語、言語の3つに分けた。

喃語(非叫喚音声から成る意味不明瞭な音声で、伝達意図に動機づけられていない)。

原言語(日本語になっていないが、文脈から意味のわかる音声。Halliday のいう内容(意味)—表現(音声)の二層構造から構成されている。Halliday は原言語においても内容と表現の間に組織的な一貫した関連がある組織性と、表現活動がこれを発する子どもの生活になんらかの形で役に立つという機能性を条件にとりあげているが、本研究の原言語では機能性を主にとりあげた)。

原言語の中で分節していない音で構成され、話しかけているような音声をJargonとした。

言語(事物、場面との関連で音を一貫して使用し、子どもの音韻形態が大人の言語形式に近い。Halliday のいう内容(意味)—語彙・文法—表現(音声)の二層構造をなしている。

(2) 音声の意味機能

原言語, 言語, 模倣音声の意味機能について表4~表6に示すような意味機能に分類した。Halliday の意味機能の分類を参考にしたが、彼の定義とは必ずしも一致していない。

個人内機能とは、子どもの行為遂行に随伴する音声と感情表出の音声で子ども自身の行動をコントロールする役割をはたしており伝達意図は少いと考えられる。

個人間機能とは、他の人と相互交渉しようとするための音声で、呼びかけ、あいさつ、特定の対象へ相手の注意を喚起しようとするような子どもの側からの開始と、大人のことばや意図に対する肯定、承諾、否定、拒否、抗議などの大人への反応の音声である。

道具機能とは自分の要求を満たすのに役立てようとする

る音声で「私は欲しい (I want)」という意味の音声である。

統御機能は、自分の欲するように人を動かしコントロールしようとするための音声で人への命令 (Do as I tell you) の音声である。

叙述機能とは、事物や事象について叙述したり命名したりする際に発せられる音声である。

質問機能は、外界を認識し、より進んで探索していかうとする機能で、相手に質問し言語反応を請求しようとする音声である。聞き返し (ウン? 等) を含めた。

情報機能は、その情報を持っていない人に情報を提供しようとする時の音声で、Wh 質問への応答、相手の質問へ説明的に応答する際の音声である。

想像機能は現実をこえて新しい世界を創出してゆこうとする場合に使う音声で虚構の世界を表現していくような音声である。ふり遊びの中でつかわれたり、歌などがこれにあたる。

(3) 意味機能分類の信頼性 A 児, B 児, C 児の10分間8回分についてA, B 児については4カ月間隔, C 児については5カ月間隔で, カウントしたか否か, 意味機能分類の評定の一致度の平均を求めたところA 児76.2%, B 児83.3%, C 児76.8%であった。

結 果

(1) 音声の種類とことばの内容

表1～表3にA, B, C 児の20分間の事物操作場面での各観察時点での喃語, 原言語, 言語, 模倣音声の全音声に占める比率, 原言語の中で Jargon の全音声に占める比率, 事物操作場面での異語数及び観察と報告でのことばの内容を示した。

音声の種類についてみると, 3 児とも発達に伴い喃語が減少し, 原言語, 言語が増加していく。3 児ともほぼ8カ月には原言語が出現している。原言語が50%以上をしめるのはA 児10; 20に原言語が減少しているが(35.8%), 9; 15に55.2%を占めている。B 児は9; 14に54.8%, C 児は8; 24に59.4%に達している。ほぼ9カ月ごろには原言語が全音声の50%以上を占めるようになるといえる。

全期間を通じての各児の原言語の出現率は表7に示したが, A 児49.3%, B 児60.6%, C 児73.8%と高かった。二語発話が登場しても原言語の出現率は依然高く, A 児19; 11で60.4%, B 児19; 27に58.7%, C 児17; 22に49.6%であった。

言語の出現は事物操作場面以外でA 児10; 20に絵本を持ち上げながら“ヨイチョ”, B 児10; 11に名前を呼ばれると“アーイ”, C 児9; 8にお菓子を要求して“マンマ”が観察された。指示対象, 事象の明確なことばである指示語は, A 児は報告で11; 27にチャーチャン, ワンワン等を, B 児は12; 2に観察場面でトッチ, 報告でニャンニャン, チュンチュン等が, C 児は11; 16にアワ(オバ)チャンが観察された。喃語が消失するころ言語の占める割合が増加している。A 児14; 29に喃語0%, 言語39%で異語数は5である。B 児は15; 0に喃語0%, 言語54.7%で異語数は5である。C 児は13; 5に喃語0%, 言語3.8%で異語数は2とわずかである。次の13; 26には言語9.3%で異語数は7であった。二語発話出現の時に言語が全音声に占める割合はA 児68.3%で異語数11, B 児26.3%で異語数13, C 児47.1%で異語数16であった。

模倣音声はA 児10; 20, B 児10; 11, C 児9; 8に出現し, 初語の出現の時期と一致している。内容については後に検討するがA 児16; 18に13.8%, B 児17; 24に15.6%, C 児15; 27に10.6%と増加している。

音声の内容についてみると, 喃語はA 児, 7; 4ではウーが主で他にアー, アウーがあった。8; 5ではアー, アッ, ウー, イーの母音が主で他にわずかダダダ, チャチャチャ, ターター, バーの [t] [d] [b] の音声のでている。9; 15ではバー, バッババババ, ター, マンマンマン, ヤー等で [m] [j] の音新たに出現している。10; 19ではアーバー, バーブ, アーダと異った音の組みあわせの喃語がでている。11; 27は母音の他にワーワー, 12; 23にはアー, ナーナー等の音声があらる。

B 児は, 7; 1の喃語は, アー, ウー, アウー, パババで主に母音と [b] の音声であった。8; 4は姉と一緒にいたためか全音声数5と少く, 喃語は4でアア, アバであった。9; 13は母音の他に1回だけジャーがあった。10; 11は喃語はアアとターだけであった。11; 8はウー, アーの他にタタ, チャチャチャ, バババで [t] [tʃ] の音声がかった。12; 2はウー, パ, プブで [p] の喃語があった。12; 21はチャチャー, ター, エー等である。13; 14はウー, ンダンダ, ブーブー等があった。

C 児については, 7; 28はアー, イー, ウーの母音がすべてであった。8; 24は母音の他にドゥワアー, ナンナン, ターターンがみられた。9; 8はイー, エー, アーチャ, チーチャーがあった。9; 28は母音の他にバババ, ソバ, ウーマンマン, それ以降は喃語の出現はごくわずかであった。

喃語は、はじめは呼気に伴い発せられ、母音が主で延ばした音声である。しだいに [t] [tʃ] [d] [b] [p] [m] [n] の子音で分節した反復喃語があらわれている。

原言語の意味機能についてはあとにみることにする。原言語の形態は種々の音韻で構成されていた。ここでは、比較的、一定の形態をとっているものについてみていく。まず Jargon についてみる。

A児13;11に電話を耳にあてムニャムニャというのが観察された。これ以降観察時期で増減はあるが18;18まで全音声に占める Jargon の割合は5.2~21.5%であった。B児は13;5に話しかけるようなかんじでしゃべるとの報告があった。観察されたのは14;9で全音声に占める割合は15.5%であった。15;0~17;2は Jargon はわずしかみられないが17;24~19;27は6.7%~15.0%であった。Jargon の少い時期は後にのべるように一貫した音声を一定の状況で使用していた。15;0にはワンワンを果物、動物、化粧道具などT(注1)がもってきた事物の命名に、15;23にはツミキをみながら叙述したり、ツミキを積んだり、入れたり、おちた時にタタ、チを、16;18には何かをみつけたり、わたしたりしながらチチを使用している。C児は12;15にTに話しかける時に Jargon が観察された。またこの回ナンナッタの音声を叙述で頻繁に使用していた。13;5は Jargon がさかんで全音声に占める割合は16.3%であった。13;26、15;7は Jargon は少いが、他児のように一定の音声がかみへで一定の状況で使用されることはなかった。後にのべる意味機能から Jargon をみると、A児では叙述機能に占める割合が高いが、17;7には出現しているすべての意味機能に Jargon がみられた。B児は14;9では、ツミキの絵をみて話しかける時に Jargon が使用されすべてが叙述機能であったが、17;24からは叙述の他に質問、道具、個人間機能にも Jargon がみられた。C児はすべてが叙述機能であった。

他の比較的一定した音韻の形態としては、A児では9;15のかがみへのバツ、呼びかけのアッ、10;19の呼びかけのアッ、わたすときのダタ、11;27のみせる時、しらせる時、わたす時のアッ、ボール投げをしながらパーン、12;23のほしい時のアッ、アッ、よろこびを表現したワー、アー、残念の感情のワーッ、ボールやかごを投げる時のアーン、13;12のツミキを入れる時のウッ、ほしい時のウウーウー、14;9のツミキを出す時のイー、ほしい時のウッ、ウーウー、(14;29、17;8、20;3も要求の時同じ音声)であった。

B児は、9;13で人への呼びかけアッアッ、床のもの

を放りなげアッ、アーアー、10;10にツミキなど放りなげる時にターン、入れる時にタッ、11;8は床のものを払いのけるのにアー、エー、12;2にツミキをいれる時とだす時にタッ、わたす時にアッアッ、なにかみつくてワー、よろこんでアー、12;21にわたす時にアッアッ、欲しい時にアッアッ、アー(14;9、15;0、15;23も要求の時同じ)、ツミキの出入れでタッ、鏡にむかいバツ、14;9によろこびをワー、アー(15;0、15;23も同じ)、15;23にツミキの絵をみてタタ、つむ時にタタという。16;18にはもっているものをチチとってみせて叙述する。欲しい時はウウウ(17;2、17;24、18;24)を発した。

C児で原言語で一定の音韻の形態がみられるようになったのは9;28でほしい時にアーアーアーを発した。10;23になにかをみつくてアッ、11;16に人やかがみへの呼びかけでアッ、よろこび、おどろきをアー、わたす時にエッエッ、12;15にわたす時アッ、観察者への呼びかけでターター、事物についてTに叙述伝達する時にナンナッタ、13;5によろこび、おどろきをアッ、話しかける時にダダ、なにかの動作を行いながらアー、13;26によろこび、おどろきをワー、アー、ひき車のことをババババ、15;27に音に関することをパパ(チーパッパのレコードよりきている)と表現していた。

言語の出現時期についてはさききのべたが3児とも指示詞が出現するまでは、表1~表3の下に示すように主に要求、動作にむすびついたことばがわずかにある。A児は15;20に指示詞のココが観察された。絵本をさかさにもちあげ、絵を指さしながら“ココ、ココ”といった。B児では15;0にツミキで一杯になったコップを“ココ”とGM(注2)にみせたり、スプーンを探しにいき“コエ?”と尋ねて指示詞((demonstratives) Werner, 1963による)が出現している。C児は13;26に“コエ”“コッチ”と近くにある玩具をとる時指示詞が出現している。指示詞が出現したあとはA児16;18にオイシイ、アッタ、ブーブー、ワンワン、バーチャン、アッチ等が、B児15;23にタターイ、シテ、ワンワン、アッタ、ゾーシャン、タッチ等が、C児14;17にアナ、アンマー、アッタ、キーン、ジョー等、指示対象、指示事象の明確なことばが増加している。

二語文の芽生えと考えられる語連鎖についてみる。A児16;18アッアレー、17;28にアーオーシー、B児16;18にアッアッタ、アッアレー、C児14;7にアッアッタの語連鎖が出現している。また語尾に助詞をつけ、疑問や強調の表現——A児17;28にワンワンワ?

注1 Tは筆者あるいは学生の略。

注2 GMは養育者の略。

表1 A児の音声の種類とことばの内容

		月令	7;04	8;05	9;02	9;15	10;20	11;27	12;21	13;11	14;08
音声の種類	音声数	16	14	34	67	67	60	55	47	58	
	種類	喃語	100	50.0	73.5	44.8	58.2	20.0	12.7	25.5	12.1
原言語			50.0	26.5	55.2	35.8	56.5	67.3	63.9	82.8	
言語						*	13.4	12.7	4.2	1.7	
模倣音声						6.0	10.1	7.3	6.4	3.4	
全音声に対するJargonの割合									*	5.2	
自発異語数							2	2	1	1	
事物操作場面でのことば							ア イ マ ン マ	ア イ ネ ン ネ	ア イ マンマ		
事物操作場面以外での発話と養育者から報告されたことば 報告は観察されたものを除き()で示した						ヨイチョ (マンマ)	ポ ン ア - イ (ネ ン ネ) (バ - バ) (チャーチャン) (ワンワン) (バイバイ)	ポ ン (チャーチャン) (パ パ) (マ ン マ) (ワンワン) (バイバイ)	バ - タ ン (ターチャン) (バ - バ) (マ ン マ) (ワンワン) (バイバイ)	ネンネ	

* 事物操作場面以外で観察された。 () は正構音した場合を示した

14 ; 29	15 ; 20	16 ; 18	17 ; 08	17 ; 28	18 ; 18	19 ; 11	20 ; 03	
54	40	65	65	86	120	53	123	
0	0	0	0	0	0	0	0	
51.8	60.0	49.3	50.8	52.4	42.5	60.4	26.8	
39.0	32.5	36.9	41.6	36.0	40.0	32.1	68.3	
9.2	7.5	13.8	7.6	11.6	17.5	7.5	4.9	
11.1	10.0	13.8	21.5	8.1	14.2	1.9	1.6	
5	4	9	7	5	12	8	11	
ナイナイ ハ イ ウ ン マンマ ネ ン	コ ー ンマ ハ イ ネ	マ ン ン オ イ ネ ン オ イ ナ イ ア ア コ	ン マ シ ョ ネ シ イ ナ イ オ コ レ	ハ イ, ン マ シ オ ワ タ	エ マ イ ン ワ ン ワ ン ア ー オ ー シ ー タ タ タ	ハ イ コ エ ハ ン ワ ン ワ ン ア ー オ ー シ ー タ タ タ	イ コ エ ハ ン ワ ン ワ ン ア ー オ ー シ ー タ タ タ	M ~ ハ イ ト ッ ウ ン ポ ー ン ワ ー コ ー イ ー ワ ン ワ ン オ イ シ イ イ イ ? コ エ ワ
	カー チャン	バ ー ア ッ ア ッ ブ ー ブ ー (オ ト ー イ コ ウ カ ン K ポ ー ズ バ イ バ イ)	オ カ ー マ ワ ッ カ ッ [シ] テ (ブ ー ブ ー ニ ャ ン ニ ャ ン バ ー ト ー)	ア ケ テ オ イ シ イ ネ シ ー シ ー (ア ッ チ ネ ン ネ オ ン ブ ク ッ ク バ イ バ イ ヨ イ シ ョ オ ト ー バ ー バ)	カ ッ テ カ ッ テ イ コ ー ヨ イ コ ー ヨ	ク チ ユ ソ ウ ネ T ク ン ド ー モ ー オ ハ ヨ ー イ イ ヨ マ ウ [ル] ソ ウ ソ ウ ブ ー ブ ー ア レ ? コ コ レ (S ク ン ト ー ワ ン バ ン ジ ャ イ シ ー)	0 シ ェ ン シ ェ ー ワ ン ワ ン ダ ー モ ー イ イ ヨ ソ ウ ソ ウ ア レ ? コ コ レ	

表2 B児の音声の種類とことばの内容

音声の種類		月令	7;01	8;04	9;14	10;11	11;09	12;02	12;21	13;14
		音声数	63	5	42	52	85	60	58	110
種類	喃語	98.4	80.0	45.2	3.8	21.2	46.7	13.8	43.6	
	原言語	1.6	20.0	54.8	80.8	62.3	51.7	77.7	41.7	
	言語				*	3.5		8.5	12.0	
	模倣音声				15.4	13.0	1.6		2.7	
	全音声に対するJargonの割合									*
自発異語数						1	0	3	5	
事物操作場面でのことば						ポーン		トッテ ポーン マンマ ア ワンワン	マ ン マ ン テ ン テ ン ン ン ン	
事物操作場面以外での発話と養育者から報告されたことば 報告は観察されたものを除き()で示した					ア ー イ (マンマンマン)		ト ッ テ (ブーブー ニャンニャン チュチュ マンマンマン バイバイ ワンワン)	バイバイ ニャンニャン ネンネ	(ア ー イ) ニャーオ ネンネ ブーブー メッ (オットオット)	

*事物操作場面以外で観察された。()は正構音した場合を示した

表3 C児の音声の種類とことばの内容

音声の種類		月令	7 ; 28	8 ; 24	9 ; 08	9 ; 28	10 ; 23	11 ; 16	12 ; 15
		音声数	44	64	94	89	56	48	92
種類	喃 語		79.5	40.6	13.8	30.3	0	6.2	1.1
	原 言 語		20.5	59.4	84.1	66.2	96.4	89.6	81.5
	言 語				*	*		2.1	15.2
	模 倣 音 声								2.2
	全音声に対するJargonの割合				2.1	3.5	3.6	2.1	3.3
自 発 異 語 数								1	1
事物操作場面でのことば								アワチャン	ア イ
事物操作場面以外での 発話と養育者から報告 されたことば 報告は観察されたもの を除き()で示した				マンマ	マ ン マ			マンママンマ バイ バイ	ナイ ナイ
					(マンマ) タッタ ネンネ)	(オーイ)	(ア グ)		(マンマ) タッタ)

* 事物操作場面以外で観察された () は正構音した場合を示した

表4 A児の音声の意味機能別の出現率

意味機能		月令	7 ; 04	8 ; 05	9 ; 02	9 ; 15	10 ; 20	11 ; 27	12 ; 21
個人内機能	行為に随伴	原言語		28.6	5.9	7.4	17.9	30.0	9.1
		言語							
		模倣						1.7	7.3
	感情の表出	原言語		7.1	8.8	3.0	6.0	3.3	34.6
		言語							
		模倣							
個人間機能	呼びかけ あいさつ 注意喚起	原言語		14.3	2.9	44.8	10.4	16.6	20.0
		言語						5.1	10.9
		模倣							
	相手の意図への 応答 (N-否定, Y-肯定, R-抵抗)	原言語			8.9N				
		言語							
		模倣							
道具機能	要求 (I want)	原言語				*	1.5	3.3	1.8
		言語							
		模倣							
統御機能	人への命令 (Do as I tell you)	原言語							
		言語					*		
		模倣							
叙述機能	叙述・命名	原言語						3.3	
		言語						8.3	1.8
		模倣						8.4	
質問機能	質 問	原言語							
		言語							
		模倣							
情報機能	Wh質問への応 答, 相手の質問 への応答	原言語							
		言語							
		模倣							
想像機能	虚構の世界の 表現	原言語							
		言語							
		模倣							
意味機能不明	原言語								1.8
	言語								
単なる音の反復	模倣					6.0			

* 事物操作場面以外で観察された

13 ; 11	14 ; 08	14 ; 29	15 ; 20	16 ; 18	17 ; 08	17 ; 28	18 ; 18	19 ; 11	20 ; 03
27.7	41.5	18.5	30.0	4.6		4.7	5.0	9.4	5.8
		16.7	2.5	9.2		1.2	6.7	5.7	3.3
				1.5			0.8	1.9	
4.3	18.9	12.9	22.5	21.6	16.9	25.6	6.7	35.8	13.0
				1.5					
							1.7		
8.5	5.2	1.9		6.3	7.7	3.5	2.5	3.8	2.4
4.2		11.1	10.0	7.7	6.3	10.4	18.3	13.2	23.6
2.1		1.8			1.5		5.0		1.6
	8.6N	1.9Y		1.5R	6.2(R,N)		3.3	1.9	
		3.7Y					0.8	1.9	0.8Y
		1.9N							
6.4	3.4	3.7		1.5	1.6				2.4
			2.5						2.4
8.5		1.9			4.6	8.1	5.8	3.8	
						8.1	2.5		14.6
6.4	5.2	11.1	7.5	13.8	13.8	7.0	15.0		2.4
	1.7	5.6	17.5	18.5	32.3	15.1	5.0	7.5	10.6
4.3	3.4	1.8	5.0	7.7	4.6	9.2	2.5	3.7	3.3
							0.8		
		1.9			1.5	1.2	3.4	3.8	13.0
				1.5			2.5	1.9	
							1.7		
					1.5		0.8		
						1.2			
							2.5		
							3.3		
2.1						3.5	1.7	5.7	0.8
		3.7	2.5	3.1	1.5	1.2	1.7		

表5 B児の音声の意味機能別の出現率

意味機能		月令	7 ; 01	8 ; 04	9 ; 14	10 ; 11	11 ; 09	12 ; 02	12 ; 21
個人内機能	行為に随伴	原言語	1.6	20.0	42.9	69.3	51.7	31.7	32.8
		言語					3.5		3.4
		模倣				1.9	11.8	1.6	
	感情の表出	原言語			2.4	1.9	4.7	6.7	12.1
		言語							
		模倣							
個人間機能	呼びかけ あいさつ 注意喚起	原言語			9.5	7.7	4.7	5.0	17.2
		言語							
		模倣							
	相手の意図への 応答 (N-否定, Y-肯定, R-抵抗)	原言語					1.2Y	1.6Y	1.7Y
		言語							
		模倣							
道具機能	要求 (I want)	原言語				*	*	1.6	8.7
		言語							3.4
		模倣							
統御機能	人への命令 (Do as I tell you)	原言語						1.7	5.2
		言語						*	1.7
		模倣							
叙述機能	叙述・命名	原言語						3.4	*
		言語							*
		模倣							
質問機能	質 問	原言語							
		言語							
		模倣							
情報機能	Wh質問への応 答, 相手の質問 への応答	原言語							
		言語							
		模倣							
想像機能	虚構の世界の 表現	原言語							
		言語							
		模倣							
意味機能不明	原言語				1.9				
	言語								
単なる音の反復	模倣				13.5	1.2			

* 事物操作場面以外で観察された

13 ; 14	14 ; 09	15 ; 00	15 ; 23	16 ; 18	17 ; 02	17 ; 24	18 ; 23	19 ; 06	19 ; 27
20.0	13.6	8.0	16.8	10.4	22.0	7.8	3.9	23.8	6.2
6.4	2.9		6.2		6.8	1.6		1.0	
1.8			1.3			0.8		1.0	
3.6	44.6	23.9	16.8	12.4	31.3	34.4	15.8	10.5	12.5
	1.9					4.7	1.3		
10.0	2.9		0.6	1.0	3.4	2.3	10.5		6.2
	1.0		1.2		0.8	2.3	5.3		
					0.8				1.3
1.8N	1.9Y		3.1N		5.1N		2.6N	1.9N	
								3.7Y	
1.8	2.9	0.8	1.9		3.4	5.5	3.9	1.0	6.2
3.6		0.8	6.8	1.0	1.7	0.8	3.9	6.7	1.3
		2.7	8.1	10.5	3.4	7.0	7.9		
1.0		0.8	6.2	6.7		0.8	2.6		
				0.9					
4.5	19.5	2.7	14.3	21.9	6.8	9.4	21.1	16.1	21.3
1.0	1.0	50.4	4.3	17.1	6.8	5.5	4.0	9.5	18.8
	2.9	1.8	7.5	6.7	3.4	10.9	11.8	9.5	11.2
	2.9	1.8	0.6			0.8		1.0	3.8
		2.7				1.6	2.6	4.8	5.0
				0.9	2.6		1.4	2.9	
			0.6					1.9	
			*					1.0	1.2
				0.9				0.9	
			0.6						
							*		
		2.7	2.5	7.6				1.9	2.5
				1.0					
0.9	1.0	0.9	0.6		1.7	3.9	1.4	0.9	2.5

表6 C児の音声の意味機能別の出現率

意味機能		月令	7 ; 28	8 ; 24	9 ; 08	9 ; 28	10 ; 23
個人内機能	行為に随伴	原言語	16.0	37.5	57.4	39.3	66.1
		言語					
		模倣			1.0		
	感情の表出	原言語	4.5	17.2	19.1	6.7	19.6
		言語					
		模倣					
個人間機能	呼びかけ あいさつ 注意喚起	原言語		3.1	4.3	5.6	8.9
		言語					
		模倣					
	相手の意図への 応答 (N-否定, Y-肯定, R-抵抗)	原言語		1.6N			1.8N
		言語					
		模倣					
道具機能	要求 (I want)	原言語		*	2.2	9.0	*
		言語					
		模倣					
統御機能	人への命令 (Do as I tell you)	原言語					
		言語					
		模倣					
叙述機能	叙述・命名	原言語			1.1	5.6	
		言語					
		模倣				2.3	
質問機能	質問	原言語					
		言語					
		模倣					
情報機能	Wh質問への 応答, 相手の質問 への応答	原言語					
		言語					
		模倣					
想像機能	虚構の世界の 表現	原言語					
		言語					
		模倣					
意味機能不明		原言語					
		言語					
単なる音の反復		模倣			1.1	1.2	3.6

* 事物操作場面以外で観察された

11 ; 16	12 ; 15	13 ; 05	13 ; 26	14 ; 17	15 ; 07	15 ; 27	16 ; 18	17 ; 22
31.3	19.6	23.8	16.7	11.1	8.2	14.7	23.2	12.5
			0.9			0.5		0.7
		7.5			1.0		1.4	
31.3	8.7	23.8	36.1	13.1	20.4	16.1	15.5	14.6
						1.4		4.0
								0.7
20.7	17.4	7.4	13.8	9.1	16.3	4.6	4.9	2.0
2.1	15.2					1.8	2.8	0.7
					1.0			
2.1N	2.2(R,N)	1.2Y		1.0N		0.5N	4.9(Y,N)	2.6(Y,N)
			0.9Y					2.0(Y,N)
	1.1	1.2	5.6		2.0	9.2	5.7	1.3
*			3.7				5.7	
	1.1							
2.1		6.2		5.1	1.0	8.8	4.2	0.7
			0.9	3.0		0.5	1.4	
				1.0		0.9		
2.1	32.5	23.8	16.6	34.3	19.4	23.9	16.9	13.9
	*	3.8	2.9	12.2	23.5	4.6	7.0	33.7
		1.3	1.9	6.1	4.1	5.1		1.3
								2.0
								5.3
						0.5		0.7
						1.0	3.6	
			*	2.0	3.1	1.8		0.7
				2.0			2.1	
2.1	1.1					4.1	0.7	0.6

表7 3児の全観察期間を通しての音声の意味機能別、種類別の出現率

音声の意味機能、種類		A 児	B 児	C 児	
個人内機能	行為に随伴	原言語	12.7	19.8	23.9
		言語	3.1	2.5	0.2
	感情の表出	原言語	14.6	16.9	17.4
		言語	0.09	0.5	0.7
個人間機能	呼びかけ・注意喚起	原言語	8.7	4.2	7.8
		言語	9.5	0.8	1.7
	相手の意図への応答	原言語	1.9	1.5	1.4
		言語	0.5	0.3	0.3
道機能	要求 (I want)	原言語	1.7	2.4	3.6
		言語	0.4	2.3	0.9
統御機能	人への命令(Do as I tell you)	原言語	2.2	3.4	2.7
		言語	2.7	1.5	0.5
叙述機能	叙述・命名	原言語	6.1	9.9	16.2
		言語	8.4	8.7	8.1
質問機能	質問	原言語	0.2	0.8	0.2
		言語	2.3	1.2	0.6
情報機能	Wh 質問への応答 相手の質問への応答	原言語	0.2	0.2	0.5
		言語	0.2	0.1	0.7
想像機能	虚構の世界の表現	原言語	0	0.07	0
		言語	0.3	0	0
意味機能不明		原言語	1.0	1.4	0
		言語	0	0.07	0
喃語			15.2	13.0	7.6
原言語			49.3	60.6	73.8
言語			27.5	17.9	13.7
模倣音声			8.0	8.5	4.9

オイシイネ, B児18; 23にオバケダ, 19; 6にコエワ?, C児15; 7にココダ, 16; 18にアッチ——も出現している。A児18; 18にカッチカッチ, B児19; 27にイッパイイッパイ, C児14; 7にアッタアッタのようにことばをくりかえし, 強調を表現していた。二語発話は, A児18; 18にTとボールなげをしていて, 即時模倣でないがTのまねで“ボールボン”, 自発で20; 3に“ワンワンアッタ”, B児19; 27に“ゾーサンナイ”, “ゾーサンノセタ”, C児17; 22に“アッチイコー”が出現していた。二語発話にならない時はA児19; 11でワンワン+

Jargon, B児19; 27(報告)にデンデンムチ+Jargonで後の部分がJargonになっている。

驚きを表現したアッ〜や語尾に助詞をつけて強調, 疑問等をあらわした語連鎖や, ことばのくりかえしから2語発話の発達ははじまると考えられる。

(2) 音声の意味機能

表4~表6に3児の原言語, 言語, 模倣音声の各意味機能の出現率を示した。観察時点をこみにした原言語と

言語の各意味機能の生起頻度の全音声数に対する比率を表7に示した。

表7をみると原言語で出現率が高い上位3つをあげると、A児で感情の表出、行為に随伴の個人内機能、呼びかけの個人間機能であった。B児、C児では行為に随伴の個人内機能、感情の表出の個人内機能、叙述機能であった。

言語の出現率は全期間を通じてA児で27.5%、B児で17.9%、C児で13.7%と低かった。上位2つの意味機能をあげると、A児で呼びかけの個人間機能、叙述機能、B児は叙述機能、次は行為に随伴の個人内機能で2.5%であった。C児は叙述機能、上位は呼びかけの個人内機能であったが1.7%とわずかであった。

原言語では感情の表出、行為に随伴の個人内機能の音声が高率を占めている。感情の表出のワー、ヤー、アー等はすべて原言語としてカウントされており、月令が上になっても原言語での感情の表出は3児とも高い比率を占めている。行為に随伴する音声もB、C児では、月令が高くなっても、ウッ、エッ、ダ、アー等を伴い原言語に占める比率が高い、言語は叙述機能のしめる割合が高く、月令がすすむとその割合も高くなっている。言語、原言語とも、質問、情報機能の比率は低い。また想像機能は、観察場面では2語発話出現までにA、B児にわずかにみられただけだった。

各児について各意味機能の音声の出現状況をみていく。

A児、8;5に玩具に手をのばし、それに伴いアッアの行為に随伴する原言語、玩具にさそわれうれしそうにアーの感情を表出した個人内機能と、GMにアッアと呼びかける個人間機能の原言語が出現している。9;2にはGMがC(注3)をおすわりさせようとするといー、うーと拒否の音声を発した。音声は伴わないがガラガラをふってみせるShowingとGivingが観察された。9;15では観察者にパッと呼びかけたり、イナイイナイバーをGMとやりながらバーと発する個人間の音声で44.8%あった。事物操作場面以外で大きい鈴をみてウンウン、うーといって手のばしてほしがる道具機能の原言語が発せられた。

11;27に言語と原言語で叙述機能の音声がある。哺乳びんをみてマンマ、マ、ぞうを手を持ちアンマーと命名している。叙述機能は14;29以降増加していく。11;27には統御機能の言語が検査場面であった。鈴の入ったびんをアイとわたしふたをあけてくれとTにたのむ。質問機能は14;29にGMがCに“これ何かな”と尋ねたの

注3 Cは子どもの略。

に対し“ウン?”ときき返したのが最初であった。聞き返しは個人間機能に近い。17;8にパンダをのぞきこみ“オイチイ?”と尋ねているのが本格的な質問のはじまりである。20;3は言語の質問が13.0%と高率であった。これはCがボール投げをTとしていて投げる際“イイ?”とやりとりの中で何度も聞くので高くなっている。またこの回“コエ?”“ワン?”と物の名を尋ねる質問が出現している。情報機能の言語は17;8に出現している。GMに“どれとってあげるの?”と聞かれ“コエ”とこたえている。18;18に人形遊びの中で自分が動物になり、動物人形を動かしながら“アー”“コンニチワ”と遊びを演じて想像機能のこたえをつかっている。17;28にアーオーシーと語連鎖を発しているが、アーは感情をあらわす個人機能、オーシーは叙述機能で2つの機能が1つの発話に共存している。

B児は7;1に手のばして玩具をとろうとする時にアッ、8;4にかがみを見てアーアーと行為に随伴する個人内機能の原言語が1回づつあった。9;14に身振りでShowingが出現し持っている玩具を観察者達にみせながらアー、アアアアといったり、観察者にむかいアッアと呼びかける個人間機能の音声で9.5%出現している。また手がはさまり、アーウーアーウーと怒った感情の個人内音声を1回発している。10;11、Tが玩具のくつのぜんまいを動かし持ちあげると、Cは手のばし“アッ”と道具機能の音声を発し要求した。また姉もっているおかしを手のばし“うーうー”と道具機能の音声を発している。11;9は、“Tくん上手ね”とGMがいうと“うー”と相手のこたえへの応答の個人間の音声を発している。12;2にパンダのハナをいじりGMの顔を見て“タッターアー”“タッ”と叙述伝達している。またこの回、統御機能の原言語がある。布をあたまたにかぶせられると笑い、そのあと“アー”とGMにもう1度布をかぶせてくれと要求する。検査場面で、ネジまき玩具がとまると“トッ”とTにわたしネジをまいてもらいたがり、言語でも統御機能の音声がある。14;9に質問が原言語で出現している。自分の持っている道具を“ヤ?”とか“ナ?”“イエッ?”とGMにみせて名前を尋ねている。この回、叙述の原言語が19.5%と増加している。次の回の15;0にはGMが“ウサギさんころがっちゃった”というところを探しにいき“コエ?”と尋ね言語の質問がある。口紅、動物人形、果物でもすべてワンワンといい叙述機能の言語が50.4%と高率である。15;23は、GMがぞうをみせ“これ何?”と尋ねると“ウータン”と応答している。他の場面でも魚をだし尋ねると“パン”とこたえ、情報機能の言語がある。ま

た原言語で歌を口ずさみ、想像機能の音声は1回あった。言語での想像機能の音声は、事物操作場面以外で天井をさし“オバケダ”“アーデタ”と18;23に発した。19;6に原言語、言語での質問が5.8%, 19;27には8.8%と増加し果物をもち“ブオー?”“コレワ”という物の名前を尋ねている。

C児は7;28の観察開始時に玩具を床にたたきながら“エー”, “アー”, “ジュー”等の行為に伴う音声は16.0%, GMをみてかなしそうに“ウー”と感情を表現した音声は4.5%あった。8;24には、皿をGMにみせ“ウンウン”という個人間の音声は3.1%, TがCのもっているものをとろうとすると“ドゥヤン”と拒否の音声を発し個人間機能の音声が出現した。事物操作場面以外で、Tがお菓子を袋の中に入れてそのままにしておくと、Tのひざに手をあて“アング”という、Tの手を持ちなき声を出し、次に“テ”と手を手を横にあげ“マー”と手はしがり、道具機能の音声がみられた。9;8にはTがひもつきのウサギをみせるとひもをひっぱり“ナンナン”(ニャンニャンの意味)と命名の叙述機能の音声がある。9;28にはネコの絵をみて“エーッ, エーッ”とネコのなき声のような叙述機能の音声を発した。統御機能の原言語は11;16に出現している。ひもつきのウサギをみせ“ひっばってごらん”とひもを示すとCは統御機能の原言語の“ター”をいい、手を下へして、おろしてくれの身振りをした。叙述機能の原言語は12;15に32.5%に増加している。13;26に事物操作場面以外で絵本の中の自動車をみていて“それは何?”ときくと“ブブー”と応答する情報機能の言語がある。C児は質問の出現が遅く、模倣で15;27に“ワンワン?”, 自発では17;22に“コエワ?”“アシュ(はし)ワ?”“ココ?”の言語での質問が5.3%あった。想像機能の音声は17;22の二語発話出現までには出現しなかった。

以上3児の各意味機能の音声の出現時期とその文脈を簡単に述べた。各意味機能の音声の出現時期は3児で異っていたが出現順序はほぼ共通していた。行為に伴う個人内機能→感情の表出の個人内機能→呼びかけ、注意喚起の個人間機能→相手の意図、ことばへの応答の個人間機能→道具機能→叙述機能→統御機能→質問機能→情報機能→想像機能であった。A児では感情、行為に伴う個人内機能と呼びかけの個人間機能が8;5に、統御機能と叙述機能が11;27に同時期に出現している。B児では感情の表出の個人内機能と呼びかけ、注意喚起の個人間機能が9;14に、統御機能と叙述機能が12;2に同時期に出現している。C児では8;24に個人間機能と道具機能が同時期に出現していた。質問機能は情報機

能の出現より遅く、A, B児の結果とは異っていた。またC児で、2語発話が出現した17;22までに想像機能の音声は出現しなかった。A児で18;18, B児は原言語で15;23, 言語で18;23に想像機能の音声が出現している。18ヶ月以降のデータも分析する必要がある。想像機能の音声は遊ぶ内容と関連しており、大人の遊びへのかかり方が想像機能の音声の出現を促していると考えられる。A, B児は同じ養育者が、C児は養育者以外が遊ぶ相手をしていることも一因かもしれない。

C児は道具機能、叙述機能の原言語がA, B児にくらべはやく出現している。マンマの初語の出現が9;8, 指示詞が13;26, 二語発話出現も17;22と言語発達ははやい。道具機能、叙述機能の原言語は、後の言語発達を予測するかもしれない。

A, C児において初語は道具機能の原言語の次の回に、B児では同時期に出現している。

3児において統御機能の音声の出現は、指示対象、指示事象の明確な指示語の出現と同時期である。統御機能の音声が出現した時期にA児で11;27に観察場面でアイ, マンマ, 報告でバーバ, チャーチャン, ワンワンが、B児で12;2に観察場面でトッテ, ブーブー, 報告でニャンニャン, チュチュ, ワンワン等、C児11;16に観察場面でマンマ, アワ(オバ)チャンがあった。

(3) 模倣音声の意味機能

模倣音声は大人のいった音声の単なる反復だけでなく、自分の文脈に大人のいった音声をとり入れ、模倣し、自分の伝えたい意味を伝達している。また大人のいった文の中から1部をとりだし模倣していることが多い。

表4—表6に模倣音声の意味機能と単なる音の反復の出現頻度の全音声に対する比率を求め示した。全観察期間を通して、模倣音声の意味機能の種類別の全模倣音声に対する比率を求めると単なる音の反復はA児15.9%, B児18.5%, C児25.0%であった。意味を伴わない単なる音の反復は、子どもがその言葉の意味を理解できていない時、～と促された時に生起している。本研究で一番最初に観察された模倣は単なる音の反復であった。A児10;20にGMがCのもっているブラシで“チョーダイ”, “ドーン”とやりとりしている時、動作は伴わず“ドージョ”, 哺乳びんをCがなめている時GMが“マンマンマン”と言うと“マ”といった。B児はGMが“ポーン”といいながらツミキをコップに入れるのをみていて“ターン”という。動作は伴わない、C児9;8にTがCの持っているものを“チョーダ

イ”という“アーダイ”と発した。動作は伴われず単なる音の反復と考えられる。

各児の模倣音声の意味内容についてみる。A児11;27にかがみにむかいバーと遂行に伴う個人内機能の音声での模倣, GMがCに哺乳びんをわたし“マンマンマンのむんだよね”というと叙述機能の音声で模倣している。13;11には“おばあちゃんがさっきバナナたべようっていったでしょう”とGMがいうと“オバートン”と呼びかけの個人内機能の音声で模倣している。14;29までは自分の言えることばの模倣——マンマ, ネンネ, ナイナイ——が主であったが, 15;20からは知らないことばの模倣がでている。単なる音の反復で意味がわかっていないがGMがCの本の持ち方を“サカサです”という“カカサ”, GMが絵本の絵を指さし“これはやぎさん”という“イーコチャン”, GMが“Mちゃんこって”という“ココ”と叙述機能の音声で模倣している。16;18では音声模倣が13.8%と増加している。GMが“女の子かわいい”という, Cはきりんをみせ, 発音はあいまいであるが“オンナノコ”と自分の文脈にとり入れ叙述機能で模倣している。またGMが“こんどはマンマになったの”という“マンマニニャッタノ”と模倣する。Cが紅をもってGMが“それ何かな”ときくと“コレナーニ”とあいまいな発音であるが紅をさしだし尋ねる。文の模倣もでている。19;11にはGMが“こうしてつづんでごらんさい”という“コウシテ?”と模倣音声を質問機能につかっている。

B児は13;14までは単なる音の反復と, ポーン, バーなど行為に伴う音声模倣であった。14;9にGMが積木が高く積んであるのをみて“タカイデショ”という“アタイ”, Cがフライパンを持っているのでGMが“フライパン”という“ウーパン”と叙述機能で音声模倣している。15;23には模倣音声は9.4%と増加している。次の16;18ではTが“入った?”ときくと“ハイッタ”と情報機能で, “きれいにいったね”という“チレー?”と質問機能で音声模倣している。17;24には模倣音声は15.6%とさらに増加している。GMが“ほらできた”という“アーデケタ”といいかえての模倣, 18;22にはGMが“きれいになった”という“キレーナッタ”と文の模倣がでている。

C児は9;8に“チョーダイ”の単なる音の反復の他にバチをひっぱりながらディディと行為に伴う個人内機能の音声模倣があった。9;28に絵本の猫の絵をみてTが“ニャー”というCは“エーッ”と叙述機能で模倣した。12;15にTが“ジージーもって”といいCの

かいていた紙をとりあげると“ジー”と手のばしして要求し道具機能の音声で模倣している。13;5には模倣音声は8.8%と増加している。“バンザーイ”の一部の模倣“アー”, “ボールポイ”とTがいうと“コイ”と絵をたたき, Tが“あたま”と頭をたたきとCは“ター”と頭をたたきながら行うように行為に伴う個人内機能の音声模倣と犬のわんわんを“ダンドン”と模倣する叙述機能があった。14;17には“お人形さんのハナは?”に対し“ハナ”と指さす情報機能, “お兄ちゃんがやるんか”とTが尋ねると“ウー〜チャン”と発音をはっきりしないがTにたのむ規制機能の音声模倣があった。15;27は音声模倣が10.6%でテープレコーダーから流れる数字の音の単なる模倣, 絵をみながらのネコ, ワンワン, ニャンニャンの叙述機能での模倣, “ワンワンだよ”という“ワンワン?”と質問で音声模倣している。

以上のように3児とも, 模倣音声といっても単なる音の反復だけでなく, 自分の文脈の中に大人のいった音声をとり入れ, 意味機能をもった音声模倣をしていた。意味機能の出現時期はC児の15;27の質問機能以外は, 自発でその意味機能が出現してから, あるいは同時期に出現していた。

考 察

大浜ほか(1978)では, 喃語は16, 17カ月になると激減すること, 武井ほか(1984)は13カ月で14%, 24カ月以降はみられなくなることを報告している。本研究ではA, B児で15カ月, C児で13カ月で喃語は0%になり, 彼女らの研究より, より早期に消失している。場面のちがいによるのか, 喃語の定義の違いによるのか, 対象とした子供の言語発達の違いによるのか検討する必要がある。

原初語の初出期は, 大浜ほか, 武井ほかでは, 6, 7カ月でわずかに生起することを報告している。本研究のB, C児では観察開始の7カ月すぎに出現していた。それ以前については, ここでは分析していないので不明であるが, 彼女らの報告とほぼ同じ時期に初出している。

言語の初出は大浜ほかで10, 11カ月, 武井ほかで, 掛け声, 独語が9カ月に初出している。本研究ではA, B児で10カ月すぎ, C児で9カ月に初出しており, 彼女らの研究と一致している。

Halliday(1975)が9カ月から内容・表現の二層構造をもった原言語があることを, Doreら(1975)が喃語と言語の間に音声一貫様式があることを報告していることは, 本論文の問題のところでのべた。本研究においても喃語と言語の間に意味をもった音声——原言語——が

7カ月すぎから初出し、二語発話が出現してもA児で26.8%、B児で58.7%、C児で49.6%も出現して、かなり長期にわたり存在している。本研究では内容のある音声、即ち意味のある音声を原言語としたので、表現形態が一貫していないものも含めている。表現形態が一貫しているものは必ずしも数は多くなかった。一貫した表現形態が一貫した意味をあらわしているものは、3児に共通してみられたものとして、喜びやおどろき等の感情の表現の時にワー、アー、物をわたしたり、わたしたのんだり、みせる時にアッ、エッ、呼びかけの時にアッ、アーッ、要求の時にアーアー、アッ、ウッ、ウーウー、常にはないが叙述の時の Jargon、二児に共通していたのは(類似の音を含む)、鏡にむかいパッ、(A、B児)、投げる時にパーン(A児)、ターン(B児)、ツキミをいれる時にウッ(A児)、タッ(B児)であった。これらの音声は観察時点をこえ、長期にわたり用いられていた。各児特有なものとして、C児で音がでるものをパッパッ、事物の叙述の際のナンナッタ、B児の積木をつむとき、積木をみてタタ、もっているものをみせて叙述するのにチチがあった。

Dore らは音声一貫様式として感動表現、道具的表現、指摘表現、群化表現の4つをあげている。本研究において感動表現、道具的表現は3児に共通してみられ、一貫した音声を用いられていた。指摘表現は環境のある側面に気づくとき、あるいはそれを指摘する時に生じ方向づけられた凝視と指さし行為に随伴しやすいとしている。本研究では3児に共通にみられた指さしに伴う Jargon がこれにあたると思われる。群化表現はB児にみられた「おちた」「あった」を表現する「タタ」、自分のもっているものをみせる時の「チチ」やC児の音に関するものについての「パパ」がこれにあたると思われる。B児の15;0のワンワンも形式は言語であるが、果物でも動物でもTが持ってきたものはすべてワンワンと表現しており、この群化表現にあたると思われる。子どもにとり情緒的に等価な事象に対し群化の操作を加え同一の音声パターンを結合させている。群化表現は、一定の音声がある一定の子どもにとり等価な事象を表示しており、言語増加の時期と一致しており機能的には言語と同じ位置づけがなされるものであり、指摘表現も言語増加の時期に出現している。Dore らは指摘表現、群化表現は指示機能の芽をもち初語の出現はこの種の音声一貫様式により発現を促されるとしているが、本研究では初語が出現してから指摘表現、群化表現は出現しており、言語の出現でなく増加と密接に関係していると考えられる。

岡本(1982)のいうように、少数の特定音声について般用をくり返すことによって、子どもは音声と外界とのあいだに代表的な対応関係をつくり出しうることを発見し、自分の音声を外界を表現するための手段として用いるという基本的な「言語的構え」をうちたてている。

Werner ら(1963)は、対象指示活動の顕われは、1つは〈指さし〉という独得の身振りであり、もう1つは「ダ」(da)とか「タ」(ta)という指示詞的な発声であるとしている。本研究の3児にはこのような発声はみられなかった。また Werner は「これ」(this)、「あれ」(that)を一連の音声的指示表現の発達の頂点に達するものとしている。本研究の3児においても、A児15;20、B児15;0、C児13;26に「コレ」「ココ」「コッチ」が出現している。そしてこの指示詞が出現してから、事物、事象を表わすことばが増加してくることは、意味するものと意味されるものの関係が明確になり象徴機能が成立してきたことを示している。Halliday のいう内容・語彙一文法・表現の三層構造をもつ位相Ⅱに入ったことが示されている。

次に音声の意味機能についてみていく。Werner ら(1963)は言語に先行する発声について状況の三大成分(自己・他者・対象)のどれをも分節したり、表示したりしていないが〈態度の様式〉つまり〈欲求〉、〈接触を求める願望〉、〈疑問〉、〈擬似的言明〉あるいは〈主張〉などはある程度表現しているように思われるとしている。Mary Shirley の観察から態度に関する前言語的表現は通常生後10カ月から11カ月の間にあらわれ、会話的なわけのわからぬ言語(Jargon)で話し、初期の理解可能な話しことばの中にもひきつがれ、それと混じりあっていたとしている。このような未分化で漠然とした性質をもった幼児の表現の中から状況をある点で〈指示する〉ような特定の表現があらわれてくる。指示表現は接触や欲求や願望の態度よりも、陳述的な態度が支配的な場合にあらわれる。喃語から呼び声に、そして指示的描写的な《命名へ》へという極めて初期の個体発生的変化は、まず第一に〈接触〉の態度に始まり、〈欲求〉の態度を経て最後に〈陳述的〉態度に至る。Werner らは本研究でとりあげた感情の表出、行為に随伴する個人内機能についてはのべていないが、本研究の結果で8~9カ月ごろの人への呼びかけの接触の態度に始まり、道具機能の要求、叙述、命名機能の陳述的態度に至っている点では Werner の考え方が実証されている。

Halliday が観察した Nigel の9-10½カ月(NLI)の意味機能には、道具機能、規制機能、個人間機能と個人内機能があげられている。Halliday のいう個人内機

能の内容は本研究の個人内機能でとりあげているものとは異っており、子どもが自分の特異性、特殊性を表現する機能で個人的な感情や意向がこれにあたる。9—10ヶ月では参加 (participation) と撤退 (withdral) があげられ、参加には興味、関心と快楽が含まれている。興味、関心には、本研究で叙述機能としてとりあげたものが一部含まれている。12—13ヶ月 (NL3) に想像機能があらわれる。発見機能は客観的な環境の探索の音声で、個人機能の発達を通し自己から分離した非自己の探索の機能をもっている。一方、想像機能はその人自身の環境をつくりあげるもので発見機能と密接に関係しており同時期に出現する。発見機能は本研究での質問機能であり、A児では14;29の聞き返しの言語、B児14;9の原言語、15;0の言語、C児17;22の言語で出現していた。Halliday の観察でみられた13ヶ月までには出現していなかった。想像機能は A児18;18の言語、B児15;23の原言語、18;23の言語で Halliday の観察よりかなり遅く、Halliday のいう位相Ⅱあるいは位相Ⅲになってからである。情報機能は Halliday では内容・語彙一文法、表現の三層構造をもつ言語が出現する位相Ⅱ (16½—18カ月) に出現するとしている。本研究でA児言語で17;8、B児原言語、言語で15;23、C児言語で13;26に出現している。本研究でも指示詞が出現し言語が増加していく時期に情報機能は出現し Halliday の結果と一致している。情報機能の出現は対話の成立を示すものである。Halliday の資料は毎日の生活の中での日誌的記録からの分析である。本研究のような3週間間隔の実験的場面の観察では、意味機能が出現している。この場面で観察されなかったものもあり、Halliday の結果との違いは分析資料のちがいが一因と考えられる。

岡本 (1965) は言語機能成立の基本的必要条件の1つとして社会的道具として自己音声をオペラント的に使用することをあげている。本研究で道具機能の音声と同時に、あるいは次の回到初語の出現が、統御機能の音声の出現と指示語の出現の時期が一致していたことは、道具として、人との関係の中での道具として音声を使用できるようになることが言語の出現と密接に関係していることが示されている。しかしこの社会的道具として音声をオペラント的に使用する条件だけでは言語機能は成立せず、岡本は音声象徴性をもつこと、自音声と他音声が等価な機能を獲得することをあげている。これら2つは象徴機能の発達に負うところが大きい。

次に模倣音声について考察する。模倣は単なる音の反復でなく、大人のいった言葉の一部あるいは全部を自分

の文脈の中にとりいれ、意味機能をもった音声模倣をしていることがあきらかになった。井上ほか (1979) は1:8の1女児の3時間の資料から母親の発話を子どもが模倣したと思われるようにみえる対話的発話を44組とり出し、音調に重点をおき解釈した。たとえば母親の「ない (ノ)」に対し、子どもの「ナイ (ハ)」は問答の関係になっており模倣でないとした。純粹に模倣と考えられる発話は44組中わずか4組で、全対話総話の1.4%にすぎなかったことを報告している。本研究では問答の形式になっているものも模倣としてとりあげ情報機能の模倣としたがその結果音声の単純な反復は全期間の模倣総数に対してA児15.9%、B児18.5%、C児25.0%であった。我々の分析資料は井上らが分析の対象とした20カ月以前の、9~10カ月から18~19カ月のものである。単なる反復は発達に伴い減少しており20カ月ではさらに減少することが予想される。指示詞が出現した次の回から3児とも叙述機能の命名、陳述の音声模倣が増加している。これは語彙の増加に音声模倣が大きな役割をはたしていることを示している。

音声の意味機能の分析は、何がこのような意味の分化を生じさせているかはあきらかにしていない。Halliday は成人言語の体系と機能が達成されるためには、経験の代表化に関する観念と社会的行為形式としての伝達過程の2つを発達させなければならないとしている。今後はこれらの意味機能の分化と子どもの認識、社会性との関係をあきらかにし、意味機能の分化をもたらす要因がいかなるものかをさぐっていきたい。

最後に健常児の前言語から言語への発達過程の分析から、ことばの獲得の遅れている子どもへの指導方法について考えてみる。前言語段階において、行為に伴伴する音声、感情表出の音声、人への呼びかけの音声、要求の音声が出現している。人を手段として自分の目的を達成するために発せられる統御機能の音声の出現と同時に観察場面で有意義語が出現している。子どもの感情を十分に表出させ、行為をしながらかんに発声する状況をつくること、人への呼びかけだけでなく、大人を自分の目的達成のためにつかうようになるために大人とのやりとりをさかんにすることがまず必要である。言語以前の原言語の表出をさかんにし、大人の側がそれを意味づけしていくことにより子どもは自分の文脈で大人の音声をとりいれ模倣し、自発語としていく。Watson (東, 1985 による) や Lovaas (1977) の言語指導プログラムでは、注意の形成、身体運動の模倣等のいくつかのステップの後に音声模倣訓練を重視し、次に理解、生産の面での事物の名前づけを行っている。意味を伴わない単なる音の

反復は語彙の増加につながらない。また大人が事物や絵カードをみせ「これは何?」と質問し答えるのは情報機能の音声である。情報機能の音声は本研究や Halliday の研究の結果から健常児では個人内機能、個人間機能、道具機能、叙述機能、統御機能、質問機能の音声のあとに出現している。また子どもが最初に発することばは、事物の命名や動作をあらわすことばではなく、行為に随伴するアイ、ポーン、ヨイチョ、ナイナイ、人への反応のアーイ、要求のトツテ、事物の命名としては幼児語のワンワン、ブーブー、ニャンニャン等である。Lovaas や Watson らの言語指導において、絵カード、事物への命名を音声模倣のあとのステップとしておいているが、コミュニケーションとしての意味機能をもったことばを発達させていくためには質問機能の音声が出現し、名前をしりたい要求が高まってからでないとも効果は少いと予想される。

二語発話の出現においても、はじめから自立語を2つつなげるのではなく、アアアッタ、ワーコーイ(ヒ)一等のアー、ワー等の感動、イッパイイッパイのようなことばのくりかえしでの強調、～ネ、～モのように語尾に助詞をつけ強調や確認を求めるような場合に語連鎖が生じている。健常児の場合、語連鎖が出現した後、それほど時間をかけずに二語発話が出現してくる。発達遅滞児の場合一語発話がでてその段階に長くともどまり二語発話の段階へ移行するのがむづかしい子どもが多い。天野(1980, 1981)は一語文後期段階にある発達遅滞児を対象に動詞述語構文の産出能力を形成する教育プログラムの開発を行っている。我々も(大野, 1983; 名越, 1984)この方法で9才と14才のダウン症児の言語指導を行い、指導場面においては「サルがリンゴをたべる」のような3語文を自力で産出できるようになり、効果をあげたが日常場面での二語発話、三語発話の生産はむづかしかった。言語発達の遅れている子どもへの言語指導プログラムをつくっていく際、健常児の言語発達過程からあきらかにした順序性をステップとしてとりいれていくことがコミュニケーションの中で意味機能をもったことばを発達させていくために必要である。子どもの感動、感情が発話の中にこめられるような場面、材料、大人との関係をつくっていくことが言語指導における基本である。

要 約

前言語期から言語期における音声の発達をあきらかにするために3児を3週間間隔で7カ月すぎから二語発話出現まで観察した。20分間の大人との事物操作場面での

遊びの中で発せられた音声进行分析の対象とした。喃語、原言語、言語の出現率を求め推移をあきらかにした。原言語——内容(意味)——表現(音声)の二層構造から構成されている——は7カ月すぎに出現し、9カ月すぎに全音声の50%を占め、二語発話が出現しても27~59%を占めていた。原言語の中で特定の状況で一定の音声が使用されることがあり、Dore ら(1976)のいう感動表現、道具表現、指摘表現、群化表現の4つがみとめられた。指摘表現、群化表現は、言語の増加の時期と一致していた。言語は9~10カ月ごろから初出し、喃語が消失する14~15カ月ごろ言語の占める割合が10~50%となり語数も5~7となる。指示詞の出現を契機とし指示語が増加する。二語発話出現の前に、強調、驚きを表現した感嘆語や助詞のついた語連鎖やことばのくりかえしが15~18カ月に出現していた。二語発話は18~20カ月に出現した。

原言語、言語、模倣音声を文脈から、個人内機能、個人間機能、道具機能、叙述機能、統御機能、質問機能、情報機能、想像機能に分類した。出現順序はほぼ3児に共通で個人内機能にはじまり、想像機能が最後で、上のべた順序であった。原言語は感情の表出、行為に随伴の個人内機能の音声の占める割合が高かった。言語は叙述機能の音声の占める割合が高かった。道具機能の音声の出現の後あるいは次の回に初語が、統御機能の音声と同時期に指示語が出現していた。

模倣音声は、初語の出現の時期と一致していた。はじめは単なる音の反復であったが大人のいった言葉の一部あるいは全部を自分の文脈の中にとり入れ意味機能をもった音声模倣をするようになった。全期間を通じ単純な反復は16~25%であった。指示語が出現した後、叙述機能の命名、陳述の音声模倣が増加している。これは語彙の増加に大きな役割をはたしている。

音声の意味機能の分化と認知、社会性の関連について検討していくのが今後の課題である。

健常児の前言語から言語への発達過程の分析から、ことばの獲得の遅れている子どもへの指導方法を考えると、コミュニケーションの中で意味機能をもったことばを発展させていくためには、子どもの感動、感情が発話の中にこめられるような場面、材料、大人との関係をつくっていくことが必要である。意味を伴わない反響語の形成、質問に応じての応答のような指導方法は健常児の意味機能の発達から考えると無理がある。健常児の意味機能の発達のステップをふまえた指導が必要である。

〈謝辞〉 長期間にわたり本研究に御協力下さいました

3児の御両親ならびに養育者の方々に心より感謝いたします。またVTR撮影等資料収集を手伝って下さいました方々にも厚く御礼申し上げます。

本研究をすすめるにあたり貴重な御示唆をいただきました大阪樟蔭女子大学名倉啓太郎先生に厚く感謝の意を表します。

文 献

- 天野清 1980 中度発達遅滞児に対する動詞述語構文の形成教育プログラム 昭和54年度科研費特別研究「言語」天野班研究報告書, 国立教育研究所。
- 天野清 1981 発達遅滞児に対する言語の形成教育 発達障害研究, 3, 37-47.
- 東正 1985 学生・教師のための精神遅滞児要説 川島書店。
- Bates, E. 1976a *Language and context: The Acquisition of Pragmatics*. Academic Press.
- Bates, E. 1976b Pragmatics and sociolinguistics in child language. In Morehead, M. & Morehead, A. (Eds.) *Language Deficiency in Children: Selected Readings*. University Park Press, pp. 411-463.
- Dore, J., Franklin, M. B., Miller, R. T. and Ramer, A. L. H. 1976 Transitional phenomena in early language acquisition. *Journal of Child Language*, 2, 21-40.
- Halliday, M. A. K. 1975 *Learning how to mean: Exploration in the development of language*. Arnold.
- 井上孝代・宮原和子・宮原英種 1979 二語発話形成期における幼児の言語習得過程の分析(1) 日本心理学会43回大会発表論文集, 431.
- Lovaas, O. I. 1977 *The autistic child: Language development through behavior modification*. Irvington publishers. 梅津耕作(訳) 1979 自閉児の言語—行動変容によるその発達— 岩崎学術出版。
- 村田孝次 1981 言語発達研究 培風館。
- 村田孝次 1984 日本の言語発達研究 培風館。
- 名越久枝 1984 一ダウン症児への言語指導に関する研究 島根大学教育学部卒業研究。
- 岡本夏木 1982 子どもとことば 岩波新書。
- 岡本夏木 1965 言語機能の成立過程——(そのII)—— 会話的行動の成立—— 京都学芸大学紀要 A No. 27, 73-80.
- 大浜幾久子・荻野美佐子・斉藤こずゑ・武井澄江 1979 言語行動の発達発達(I): 2から17カ月児の時間標本法による観察資料の分析(擬似縦断法) 東京大学教育学部紀要, 18, 177-199.
- 大野千由里 1983 ダウン症児への言語指導についての研究 島根大学教育学部卒業論文。
- 武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・斉藤こずゑ 1984 母子相互作用における発話機能と動作の関係 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 66-67.
- Werner, H., and Kaplan, B. 1963 *Symbol Formation: An Organismic-developmental approach to language and the expression of thought*. Wiley. 柿崎祐一(監訳) 1974 シンボルの形成: 言葉と表現への有機—発達論的アプローチ, ミネルヴァ書房。